

そして、日本でエリウゲナ思想をもっとも高く評価していた哲学者は西田幾多郎であった。とくに、「創造するが、創造されない自然」と「創造せず、創造されもしない自然」とが同一のものである、すなわち神は作出因であると同時に目的因でもあるとするエリウゲナ思想、また、「止まれる運動、動ける静止」といったようなエリウゲナの弁証法的思惟は、西田が自らの根本思想を述べるさい、共感をもって言及されるのであるが、その西田のエリウゲナ解釈について、また西田の思想とエリウゲナのそれとの関係について、何か見直しを促す新たな状況が提示されたのか。

---

## 特定質問

### 八 卷 和 彦

1000年以上も前の思想家の肉筆に出会えること、それも今氏が長年にわたり研究対象としてきている人物の肉筆が確定されて、それを目の当たりにすることの感慨には、格別なものがあるだろうことは想像に難くない。この事実の確定に到るトラウベやジョノーらの先行研究にも、同じような感慨が動力因として働いていただろう。先行研究を踏まえながら、骨の折れる文献学的研究にまい進する今氏の姿には敬服の念の禁じえない。以下に門外漢による三点の質問を提出したい。

- (1) エリウゲナの筆跡と認められるに至った当該写本の欄外加筆を考慮した場合に、例えば Periphyseon において、原文の思想と加筆後の思想との間に何らかの変化が見出されるのか。もし見出されるとしたら、どのような変化か。
  - (2) エリウゲナの写本の中世における流布・保存の状況にいかなる特徴が見出されるか。1225年に教皇ホノリウス三世がエリウゲナ思想を批判して「異端」宣告をしたようだが。
  - (3) 上の(2)と関わって、エリウゲナ思想の中世における位置はいかなるものであったか。
-